

沈黙の奪還

2007(平成19)年2月12日鑑賞(ユウラク座)

★★★★



監督＝ミハエル・ケウシュ／出演＝スティーヴン・セガール／エヴァ・ポープ／スカイ・ベネット／イメルダ・スタウトン／マイケル・エルウィン／ヴィンセント・リオッタ（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2006年アメリカ映画／95分）

…… 15年間働きずくめのセガール親父の『沈黙』シリーズは既に12作目。『ロッキー・ザ・ファイナル』を迎えたシルベスター・スタローンは、30年間で全6作だから、よく頑張ったもの……？ 新型ウイルス、ロシアのFSBそして今回の舞台となったルーマニアのブカレスト警察など、相変わらず物騒でややこしい話が満載……。しかし今回は、「奪還」の対象を愛娘と定め、強いだけではなく、人間味溢れる父親像をセガールが熱演……？ 『SHOW - HEY シネマルーム』は現在12作目を製作中だが、『007』シリーズは現在22作目を製作中。さて、『沈黙』シリーズは、いつこれに追いつき、追いつくだろうか……？

🎬 「15年間で12本」 vs. 「44年間で21本」

1992年の『沈黙の戦艦』以来、スティーヴン・セガール主演の『沈黙』シリーズは、2006年の本作『沈黙の奪還』によって、15年間で12本となった。ちなみに、1962年の『007／ドクター・ノオ』に始まった『007』シリーズは、2006年の『007／カジノ・ロワイヤル』まで、44年間で21本目となったが、この間ジェームズ・ボンド役はショーン・コネリーからダニエル・クレイグまで6代の変遷があった。そこで、セガール親父が偉い(?)のは、全12作にすべて自分が主演しているうえ、次第に脚本や監督・製作にまで手を出すようになってきていること……？ 『沈黙』シリーズがこれだけ続いてきた最大の理由は、最後は必ず勝つというパターンは『007』シリーズと同じだが、主人公の役柄が殺しのライセンスを持つ

イギリス諜報員007というように固定されず、融通無碍で、何でもありとされているため……？

融通無碍の主人公が利点……？

セガール扮する『沈黙』シリーズの主人公は、マーシャルアーツ、空手、合気道等あらゆる武術を極めているうえ、銃器の扱いも天下一品というのが全作品共通のキャラ。しかし、その職業は元CIA捜査官や軍特殊部隊というものだけでなく、従軍料理人（92年の『沈黙の戦艦』）、爆薬消火技師（94年の『沈黙の要塞』）、EPA（アメリカ環境保護庁）の調査官（97年の『沈黙の断崖』）、免疫学者（98年の『沈黙の陰謀』）、爆発処理班のリーダー（01年の『沈黙のテロリスト』）など多種多様。まあ、何でも『沈黙』という冠をつければヒットするから、そうしているのだと言えればそれっきりだが、そこまでのブランドに高めてきたのは、やはりセガールの魅力と努力のたまもの……。

セガール vs. スタローン、セガール vs. 映画評論家 SHOW-HEY……

1951年生まれのセガールはまだ56歳だから、1974年から30年間で6作目となる『ロッキー・ザ・ファイナル』（06年）を完成させて打ち止めとした1946年生まれのシルベスター・スタローンよりかなり若い。したがって、まだまだ『沈黙』シリーズは続きそうで、20本ぐらいいくはず……？

他方、現在12本目というのは、来る4月に出版される『SHOW-HEY シネマルーム』シリーズの12作目と同じ。1949年生まれの私の著書『シネマルーム』は、今後も1年間で3冊は出版されるはず（？）だから、『沈黙』シリーズを追い越すのはもうすぐだが、私としてはこれからも良き競争相手としてセガール親父と『沈黙』シリーズを見守っていかなければ……？

今回のテーマは？

『沈黙』シリーズは毎回そのタイトルにテーマが象徴されているが、今回のテーマは、ステイーヴン・セガール扮する元CIA捜査官で今はフォーチュン誌の優良企業500社に名を連ねる企業家として成功しているジャック・フォスターによ

る、奪われた最愛の娘アマンダ（スカイ・ベネット）の奪還。今回の舞台はルーマニアの首都ブカレストだが、それはジャックがアマンダと共に亡くなった妻の故郷へ休暇旅行に赴いたため。

そこで暗躍するのは、アメリカのCIAと旧ロシアの秘密組織KGBに代わる新しい政府機関FSB、そしてブカレスト警察達の面々……。一体誰が、何の目的で、ブカレスト国際空港に降り立つジャックを出迎えにきたアマンダを拉致したのか？そしてジャックは無事アマンダを奪還することができるのか……。それがこの第12作目のテーマ……。

冒頭に暗示される2つの物語……

映画の冒頭、ハツカネズミを対象に何やら怪し気な研究をしているシーンが登場し、ワクチンの投与によってハツカネズミはイチコロに……。これが、MK ウルトラ・プログラムと呼ばれるもので、感染者に重篤な疾病を引き起し、半年から1年以内に痕跡を全く残さないまま死に至らしめるという新種のウイルス。これを研究しているのはアメリカ政府の極秘研究機関だが、もしこんな物騒なもの



DVD『沈黙の奪還』価格：¥3,990

発売・販売：ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

©2007 Sony Pictures Entertainment (J) Inc. Reserved. ©2006 MICRO FUSION 2005-1 LLP.
ALL RIGHTS RESERVED.

がテロリストの手に渡ったら……？

他方、追っ手の追跡をやっとかわした、アメリカ政府の特別捜査官ジョージ（マイケル・エルウィン）が登場する。このジョージはジャックの妻の父親だから、実はジャックの義父。そんなジョージは、ジャックがブカレストに赴く前に食事を共にした際、ジャックの携帯に対して何やら変な細工を……？

誰が味方で、誰が敵……？

ジャックがブカレスト国際空港に着き、迎えに来たアマンダを抱き上げた時、パスポートを落としたためそれを探しに戻るというのは、何事も完璧にこなすジャックにしては珍しいミス……？ もっとも、それで手間取ったことによって、本来ジャックやアマンダたちが乗り込むはずのリムジンが大爆発を起こしても、無事だったのだから、やはりジャックは運が強い……？

それはともかく、ジャックが目を離したわずかな隙にアマンダをタクシーに引っ張りこんだのは女運転手のアーニャ（エヴァ・ポープ）。他方、8年ぶりにブカレスト国際空港でジャックと再会し、一緒にアーニャを追跡することになったのは、元CIA時代の同僚ハリー（ヴィンセント・リオッタ）。

映画の冒頭に激しいカーチェイスシーンをもってきたのは、早目にサービスしようとの心配り（？）だが、結果は残念ながらアーニャにまかれてしまうことに……。そこで、とりあえずCIAの隠れ家ということでハリーに案内されたジャックだったが、なんのことはない。そこに閉じ込められる羽目になったから、果たして誰が味方で、誰が敵……？

最近は女性の上司が定着……

柳沢伯夫厚生労働大臣の「女性は産む機械」発言で、大揺れに揺れるレベルの日本では、女性の社会進出はまだまだ……？ フィリピンではアロヨ大統領が、ドイツではメルケル首相が誕生しているし、アメリカではヒラリー・クリントン、フランスではロワイヤル、韓国では朴パク・クンヘ権恵など、今まさに女性がトップになろうとしている国も多い。しかし、日本ではとてもとても……？

また、実務レベルにおいても、アメリカのライス国務長官の世界を股にかけた

活躍ぶりはすばらしいし、『007』シリーズに登場する「英国諜報機関 M16」の責任者「M」も女性。そんな世界的潮流を意識したのか、この映画で事実上ジャックの活動に大きな支援をするのが、ルーマニアにあるアメリカ大使館のコ克蘭大使で、これが女性。このコ克蘭大使を演ずるのは、『恋におちたシェイクスピア』（98年）に出演し、『ヴェラ・ドレイク』（04年）でアカデミー賞にノミネートされた、おばさんスターのイメルダ・スタウトン。Mを演じたジュディ・デンチにしても、この映画のイメルダ・スタウトンにしても、この歳になってこんないい役がもらえるのだから、長く続けている個性派女優(?)は得……？

ブカレストではタクシーにご用心……？

この映画には2人の重要なタクシー運転手が登場する。1人はいうまでもなくブカレスト国際空港でアマンダを連れ去った女運転手のアーニャ。そしてもう1人は「女がほしいんだが……」というジャックを乗せた、一見ジャックの指示に忠実に従う年配の運転手。タクシーはサービス業だから、客の秘密は絶対守るはずなどと考えるのはダメ。日本でも原則はそうだが、ほとんど守られていないのでは……？

その点、この映画を観てはじめて知ったのは、ブカレストでは、何とタクシードライバーは全員、警察と通じているということ……？ したがって、ジャックを怪しげなクラブに案内した年配の運転手は、その旨を直ちに警察にタレコミ……。また、この映画ではアマンダを車に乗せ、自分の家に匿っているアーニャがキーウーマンになるが、当然ジャックにとってはアーニャは敵。しかして、そんなアーニャと警察との距離感は……？ そしてアーニャがアマンダを自宅に匿っているのはなぜ？ そんな疑問を持ちながら、このアーニャに注目していこう……。すると後半には、ちょっと意外なアーニャの一面も登場してくるはず……？

今回は気功の技を披露……

この映画のパンフレットには「このオヤジ、15年間勝ちまくり」という文字が踊っているが、これは誰もが抱いている正直な気持……？ なぜかセガールが撃つ拳銃は百発百中なのに対し、セガールを目掛けて発射されるマシンガンが当たらないのは、もちろん映画だから……？ また、目の前で拳銃を突きつけられて

も慌てず、気のきいたちょっとした会話をかわしながら逆境を切り抜けるのもセガールの常。

今回ははじめの方に、ジャックが弟子たちを相手に気功を教えるシーンが登場するが、当然これも何らかの伏線……。 「気功には外側から相手に気を当て弾き飛ばす外気功と、相手の体内の気を操り内臓を損傷させる内気功があり、それはまさに『北斗の拳』の北斗神拳をも彷彿させる究極の技」とパンフレットに書いてある。そんな気功の技をマスターしているジャックが、それを使うシーンは一体、いつどんな局面で登場するのだろうか……？

2007(平成19)年2月14日記

ミニコラム

日本にも女性防衛大臣が誕生！

長崎2区選出の久間章生防衛大臣の「原爆投下はしょうがない」発言によって、瓢箪からコマのように(?)初の女性防衛大臣が誕生した。その名は小池百合子。郵政民営化法案の可否をワンイッシュとしたあの05年の9・11総選挙で、真っ先に東京10区に「刺客」として飛び込んでいった勇氣ある美人(?)議員だ。彼女がなぜ?と疑問に思うものの、彼女は安倍政権の発足と同時に内閣総理大臣補佐官として国家安全保障問題を担当しており、「クールビズ」以上に防衛問題は得意分野? 早速カッコいいパンツスーツ姿で着任式に臨み、防衛省の制服組から栄誉礼で迎えられた小池大臣の姿が報道され、大臣就任にあたって「感慨深い」との抱負が語られたが、正直なところまだまだおっかなびっくり状態?

しかし、日本の安全保障問題・防衛問題は1日たりとも停滞の許されない最重大事であることは明らか。安全保障問題の基軸となる日米安保問題の重要性は当然だが、北朝鮮の核廃棄とミサイル問題、ガス田や尖閣諸島問題、中台の軍事均衡問題をはじめとして、近時潜水艦能力を飛躍的に高めている中国海軍の増強問題など、新大臣がになうべき任務は重大なものばかり。政治家にとって人気取りも必要だが、それ以上に要求されるのはアメリカのライス国務長官のような実務処理能力。安倍政権の存続自体に黄信号が灯っている今、たとえ短命で終わっても、キラリと光る実績を示してもらいたいものだ。そうすれば、次期総理の可能性は? と聞かれるのが、まんざら「冗談」ではなくなってくるかも……?

2007(平成19)年7月13日